

南限に住むニホンライチョウ

朝倉俊治

(静岡ライチョウ研究会)



2007年12月2日 茶臼岳東斜面♂左♀右(朝倉)

ニホンライチョウ (*Lagopus muta japonica*) は、日本の高山に住む一夫一妻のキジ科鳥類です。国の特別天然記念物で、国内希少野生動植物種に指定され、レッドデータブックでは国(絶滅危惧ⅠB類)、静岡県(絶滅危惧Ⅱ類)ともに選定されています。ライチョウ (*Lagopus muta*) は、北半球の北部を中心に広く分布(23亜種)しています。そしてニホンライチョウは世界の最南端に生息する氷河期の遺存種で、なわばりの大きさが直径183mとされています(中村:2008)。その生活は4~6月上旬がなわばり確立・つがい形成期、6月上旬~7月上旬が抱卵期、7月上旬~9月が育雛期(以上繁殖期)、10月から11月が秋群れ期、それ以外の時期が越冬期(以上非繁殖期)に区分されます(小林・中村:2018)。

静岡ライチョウ研究会は、1997年から本種の分布南限である南アルプス光岳(2,591m)で調査を始めました。南限地域の繁殖山岳は、南から光岳近くのイザルガ岳(2,540m)で1~2なわばり、仁田岳(2,524m)で1なわばり、茶

臼岳(2,604m)で2~3なわばり、三山岳で毎年2~5なわばりが確認できます。その生息個体数は5~13個体(なわばり数×2.5(中村:2008))と推定され、変動があるものの比較的安定しています。なわばり位置は毎年ほぼ同じ場所ですが、毎年同じ場所で見られるのが同じ個体なのか、あるいは他山岳から毎年移動してくるのかわかりませんでした。

そこで2007年からは足にカラーリング3つと環境省金属足環(個体No.)1つの計4つを装着し個体識別しました。これまでに50羽を標識しています。調査は主に無雪期の6~10月に行い、およそ月1回実施しています。調査回数(2007年以降)は、イザルガ岳20回、仁田岳28回、茶臼岳44回、上河内岳21回でした。2018年までの再確認回数は延べ98回で最も多い再確認回数の個体は14回(1個体)、次いで12回(3個体)です。この調査から、毎年同じ場所で目撃されていた個体は同じ個体であった可能性が高いと分かりました。また、数年に及ぶ再確認記録をまとめ年齢を推定しました。本種

は生まれた年に初列風切羽の羽軸に黒いしみができます。このしみは翌年には換羽により見られなくなります。そのため標識時にしみを確認できれば0歳、しみが無い成鳥であれば1歳+と推定します。これまでの推定年齢は9歳+が4個体、7歳+が1個体、6歳+が2個体などでした。

2007年から2018年における個体識別でわかったのは、一年中ほぼ同じ場所で再確認される個体と季節移動するものがあることです。定着個体としては茶臼岳周辺で8年間にわたり再確認された雄成鳥個体の例を次に示します。2007年の繁殖期に茶臼岳南で標識し、その後毎年1~3回確認され、最後が2015年の非繁殖期で9歳+でした。合計12回再確認され、5~8月の繁殖期と10月の非繁殖期とも6回ずつでした。繁殖期の再確認場所の平均位置は茶臼岳山頂北のハイマツ帯でした。そして非繁殖期の平均位置は茶臼岳北方平坦地（通称ハイジの丘）近くのハイマツ帯でした。繁殖期と非繁殖期の平均位置は364m離れ、先に示したなわばり2つ分くらい移動しています。同様に茶臼岳で定着している他の3個体の平均移動距離は57m、83m、91mでした。この結果から定着個体は繁殖期と非繁殖期ともなわばり近くで生息していることがわかりました。季節移動個体としては雄成鳥個体の例を示します。この個体は2016年非繁殖期に上河内岳で標識されました。2017年繁殖期にはイザルガ岳で再確認され、その年の非繁殖期には茶臼岳へ移動しています。翌年の2018年繁殖期に再びイザルガ岳で最終確認され3歳+でした。その平均移動距離は6.1kmになります。このような季節移動する他の2個体（非繁殖期茶臼岳）の平均移動距離は1.9km（繁殖期仁田岳）、5.5km（繁殖期イザルガ岳）でした。季節移動個体は定着個体に比べ大きな移動をしています。そして定着個体と季節移動個体は秋群れ期に同一群れでしばしば確認されます。

分布南限地域には定着個体と季節移動個体があり、秋群れ期に交流を持つ一つの個体群であることが分かってきたわけです。ではなぜ南限地域に生息する個体で定着するものと季節移動する個体がいるのでしょうか。今後の調査で明らかにしなければなりません。本種が非繁殖期に群れを作ることがヒントではないかと考えています。分布末端であるイザルガ岳や仁田岳



2006年6月24日茶臼岳ペア 左♂右♀(増田章二撮影)

はハイマツ帯が小さく、孤立した山岳に1ペアとか2ペアのみが生息しています。非繁殖期には山岳ごとの生息数が少ないため、生息個体数が多い北部へと季節移動して群れをつくるのかもしれませんが。

本種の最高年齢は北アルプス室堂地域での雄11歳、雌8歳とされています（富山雷鳥研究会：2002）。南限地域でも推定9歳+という個体がいることを示しましたが、毎年ほぼ同じなわばりを持った個体が消失した後は、どこから新しい個体が供給されるのでしょうか。その答えを考える上で重要な再確認が2016年に2個体ありました。静岡ライチョウ研究会以外の研究者が標識した2個体が茶臼岳と上河内岳で見つかったのです。茶臼岳で再確認された個体は約30km離れた間ノ岳で中村浩志先生が標識した個体でした。もう1個体（上河内岳）は約38km離れた仙丈岳で同じく中村浩志先生によって標識されたものでした。2個体とも標識時はヒナです。鳥類では、個体が生まれ育った場所から離れた場所へ定着することを分散といいます。上記の長距離移動はこの分散と思われる。南限の個体群が20年以上にわたって維持されているのは、このような分散個体による供給があるからと思われる。南アルプスには間ノ岳や仙丈岳以外にも、本種の多数個体が生息できる山岳があります。これらの山岳は、南限分布地域のような分布末端地域へ本種を供給している山岳の可能性が高いといえます。南限分布地域のニホンライチョウは、孤立した個体群ではなく、南アルプス全体と繋がっているのです。